シャワーズ賞（優秀賞）

生き物との共生のために

福井県 福井市大東中学校 三年 三木家 杏珠

私は「水」という言葉を聞くと必ずと言っていいほどに田んぼが思い浮かぶ。私の家は福井市の市街地から約四十分車を走らせたところに位置する上味見という場所で、無農薬栽培米を育てる活動に参加している。そこは私の住んでいる場所とは正反対と言ってもいいような自然豊かな地域だ。私は毎年、稲作の時期になると、家族とともにその活動の一環である草取りに参加している。今だからこそ、農作業の戦力として参加しているが、小さな頃は、ひたすら生き物採集をしていた。父といっしょにヘビをつかまえたり、サワガニやオタマジャクシ、カエルを探していたのも楽しい思い出だ。

稲作は、田植えが始まる春から、稲かりをする秋にかけて行われる。この中で一番大変なのが「夏」の農作業だ。その活動では、米を無農薬で育てているため、手作業で草むしりをしなければならない。真夏の日差しに背中をジリジリと焼かれながら、腰をかがめた体勢で作業し続けるため、想像以上に重労働だ。おまけに次の日には、全身が動かなくなるほどの筋肉痛におそわれる。しかし、私はこれほどの悪条件でも、田んぼに足を踏み入れるのを嫌がったことは一度たりともなかった。私には農作業の後に一番楽しみにしていたものがあったのだ。それは「こしょうずの滝」での水浴び。同じ田んぼ仲間に教えてもらったのがきっかけだ。初めてこしょうずの滝を目にした時の感動は今でもよく覚えている。見たことがない程に澄んだ冷たい水。そしてサンショウウオと初めて出会ったのもその時だ。サンショウウオという存在を知らなかった私は、母の呼び声でそのことを忘れ、車に戻った。

再びそのことを思い出したのは、近くの温泉で疲れをいやしていた時だった。ふと目に入った掲示物。そこにはついさっき目にした小さな生き物が写っていた。絶滅とサンショウウオの二つのキーワードが目に飛び込んできた。そう、先程見た生き物は絶滅の危機にさらされているサンショウウオだったのだ。

私は家に帰ってすぐさまパソコンに向かい、その二つのキーワードを打ち込んだ。すると、その要因の一つとして、「農耕地の放棄に伴って起こる産卵場所の消失・悪化」が最も多いことが分かった。里山の稲作では、ため池が作られ、水田の周囲には水路がめぐらされる。このような場所にサンショウウオは産卵するため、水田が一つ減るごとに、サンショウウオの絶滅に一歩近づいてしまうのだ。

それは私の住む地域でも着々と進んでいる。元々水田だった土地がうめ立てられ、一つまた一つと家が建っていく。人間にとって住みよい街になる一方で、サンショウウオ達生き物にとっては生きられない街と化す。

そんな私達に今求められているもの。それは「共生」だ。私達が今住んでいる場所を水田に戻すことは難しい。しかし、今ある水田を守り、今サンショウウオの生息が確認されている場所を保護することならば可能なのではないだろうか。

水田を守るために私にもできることを考えてみる。それは、「無農薬栽培の田んぼの保存活動に参加し続ける」ことだ。水田を守り続けることは、サンショウウオだけでなく、お米を主食とする私達日本人の生活を守ることにもつながる。また、水田が減り続けている要因には、便利さを求める心だけでなく、担い手不足も挙げられる。農業を始めるには高額な初期費用がかかり、また天候に左右されやすく、収入も安定しづらい。そんな中でも農家さんは水田を守り続けてくれている。私はこれからも水田を守り続けている人々への感謝の気持ちを忘れず生きていくことを心に誓った。